

フィールド学習

Learning in the Field

三 田 育 雄*

Ikkuo MITA

平成 19 年度から 6 年間、環境ツーリズム学部
に在籍したが、その間の研究・教育活動は徹底して
フィールドを中心に行ってきた。

退職するにあたって総括するとともに、併せて長
野大学のみなさんにもご披露してご意見をいただ
ければ幸いである。

1. 授業のフィールド・ワーク

1) フィールド・ワーク中心の授業展開の動機

前任校のゼミナール、演習で目一杯フィールド学
習に取り組んでかなりの手応えを感じていたこと
から、本校でもゼミナールについては就任前から
フィールド学習中心で取り組むことを考えていたが、
一般の講義に関しても、就任後、後期の時間割を
見て決断した。

すなわち、時間割には 4 限：観光関連法規、5 限：
観光事業論とあったが、これを見て直感的に、2
コマ続けて履修する学生は持続しないのではない
かということと、そもそも関連法規だけを切り取
って話してもほとんど理解できないどころか、全
く興味を持ち得ないのではないかと思った。

今の学生はあまり旅行をしないこともあって、
歴史的街並み、道の駅、日帰り温泉、高原リゾ
ート等々といっても知らない層が少なくない
から、話、文字、画像情報を提供しただけでは
十分な学習効果を上げることができないと判
断し、“観光信州”の一角に立地する大学の
メリットを活かすためにも、現地見学を大々
的に取り込んだ学習に組み替えた。

2) 授業の組み立て

①観光事業論

フィールド学習を組み込むとなると 1 コマ授
業では不可能なので、前記の 2 コマの授業を
連結させて、実質的には“観光事業論”とし、
法規についてはフィールド学習する観光事業
に関連する部分の解説を行う形にした。

そして、学生にはシラバスとガイダンスで、
二科目同時履修を義務づけることをアナウ
ンスして学習方法を周知させた。

具体的な学習の仕方としては、例えば高
原リゾートを学習する場合、フィールドとし
て選定した菅平や峰の原高原へ出向き、当
事者である国際リゾートセンターの責任
者の方や仁礼会の役員の方に開発の沿革
と現状についてレクチャーをしていただき、
その後、現地を見学する。



(写真 1) 湯の丸高原ホテルでの社長講話

*環境ツーリズム学部教授 (2013. 3. 31 退職)

(表1) 授業でのフィールド学習対象地

平成	講義科目		ゼミナール	
19	別所温泉 東山観光農園 菅平	海野宿 美ヶ原 信州せいしゅん村	別所温泉	川場村
20	別所温泉 あさつゆ 麻績村聖高原	海野宿 やまぼうし	別所温泉 川場村	立科町
21	別所温泉 峰の原 あいそめの湯	海野宿 雷電くるみの里	別所温泉 川場村	塩田平 立科町(直売所)
22	海野宿 湯楽里館 ユウユウ立科	別所温泉 菅平・峰の原高原 マルシェ国分	別所温泉 女神湖(都市保養所) 和田宿 妻籠宿	塩田平 川場村 マルメロの里長門
23	海野宿 オアシスおぶせ 白樺湖池の平ホテル 四賀村クラインガルテン	菅平(奥ダボス) 長門牧場 軽井沢	別所温泉 和田宿 昼神温泉	川場村 草津温泉 奈良井宿
24	海野宿 望月クラインガルテン 雷電くるみの里	別所温泉 湯の丸高原 菅平・峰の原高原	別所温泉・野倉 川場村	白樺高原 飯山市

受講生は、レクチャーと配付された資料により次週までレポートを作成し、提出することが義務づけられる。

そして、次週の最初の1コマ目の授業では、数名指名して提出したレポートをもとにブリーフィングを求め、さらに質疑を行い理解度とまとめ方を確認する。

そして、教員自身のレポートを披露した上で対象地の沿革や現状の解説を行う。

さらに2コマ目の授業では引き続いて、高原リゾートの一般論や内外の事例の解説を行う形で補完する。

レポートづくりは、教員のレポートを参考にほとんど上達する学生も少なくないが、最後まで進歩のない学生も多数存在する。しかし、ほとんどの学生は現地での聴き取りには真剣にメモをとる習慣はつくようである。

②ゼミナール

長野大学では、卒業論文や卒業制作のオプションがないので、専ら企画提案型の“観光まちづくり演習”として位置づけた。

そして、ここでも、当初から入門と専門ゼミナールの2コマを連結して一体的に運用したが、さらに遠隔地への視察研修やイベント行事への参加・見学のためには休暇や休日も使った。

ゼミナールのフィールドは、後述するように自身の活動のフィールドと重ねていたので、別所温泉、塩田平、長和町(和田宿)、立科町(農産物直売所、ほっとステイ、都市休暇施設)などを対象にした。

学習の進め方としては、現地での踏査・見学・聴き取りを中心として、必要に応じてアンケート調査と集計なども取り込んで手法の習得をはかった。

それから、現地でお世話になった方々への返礼と学生に緊張感のある学習を促すために、ゼミ大会の後で現地報告会を行ってきた。

そして、そのためにも説得力があつて、わかりやすいストーリーづくりとプレゼンテーションを重視した指導を行ったが、少し負荷を掛け過ぎると、翌年のゼミ選択で大量の離脱者が出ることもあった。

学生の現地報告は、地元のケーブルテレビ、新聞などの取材を受け、わずかではあるが長野大学の教育活動の一端をアピールできたのではないかと思っている。

運用上、最大の問題と感じたことは、ゼミナール専用の学習の場や作業資料保管場がないことで、そのために授業後に自習、補習を実施することが難しかったり、作業途中の資料などは教員が預からざるを得ない状況があつて（預かれば、学生は1週間何もしないことになる）、学習密度を引き上げる上で限界を感じた。

その点、前任校では2年生以上は全員専用のテーブルが確保された演習室があり、学生は授業以外の時間は、深夜に至るまでゼミナールや演習のための学習に明け暮れていて、教員も午前0時ぐらいまで、毎晩のようにつきあっていたので、学習密度は高まるとともに学生と教員の間には親密な関係ができた。

3) フィールド学習のねらいと効果

フィールド学習のポイントは2点。一つは観光事業をパーツに分けて学習するのではなく、できるだけ総体で観察することを学習の出発点とすること、そうしてもう1点は教科書上で普遍化された理論を学ぶのではなく、事象から、いわば帰納法的なアプローチで学習することである。

専門領域の教科書は、事象を特定の断面で切り取って普遍化された理論が記述されているので、学生が十分な専門知識と思考力をもたないと全体像が理解できず、結果的には授業へのモチベーションが高まらないおそれがある。

フィールド学習の場合には、観光事業の状況を具体的に把握できるので、理解がしやすく、かつ恒続することを確信した（次ページ受講生感想文）。

特定のフィールドで学習すると偏った学習になると懸念する向きもあるが、実は逆で、個別解の学習が一般解の学習を促す効果があると考えている。

実は、これに近いことをアメリカのロスト・ジェネレーションの作家、F・スコット・フィッツジェラルドが次のように書いている。

Begin with an individual, and before you know it you find that you have created a type; begin with a type, and you find that you have created – nothing.

F. Scott Fitzgerald. “The Rich Boy”, 1926

ある特定の個人を書こうと思って書き始めると、いつの間にか、一つのタイプを創り出していることに気がつくが、反対にあるタイプの人間像を描き出そうとすると、できあがったものは、無とか空とか、何一つ創り出されていないことに気がつく。

野崎孝(訳)「金持ちの御曹司」、フィッツジェラルド短編集、新潮文庫、1990

これは、個別解の中にこそ普遍性を見いだすことが可能であるという指摘でもある。

フィールド学習には、さらに、学生が緊張感をもって学習する効用がある。

学生は、教室での座学だと遅刻したり、居眠りをするものが数多存在するが、フィールド学習では、特にレポート提出を義務づけていることもあって、授業開始(出発)までに遅れずに集合し、現地での説明は一生懸命聴きながらメモをとっているのである。

前述したように、ゼミナールでは、学内のゼミ発表会の後にお世話になったフィールドで学習成果の報告会を実施することにしているが、これも学生に緊張感を強いるという意味では効果絶大である。現地報告会が近づいてくると、プレッシャーがのしかかってきて、プレゼンテーション用のパワーポイントの作成はもとより、自身の発表用のメモをつくったり、リハーサルを繰り返したりする。

【フィールド型授業についての受講生の反応 (H20年度)】

■フィールドでの聴き取りや観察を基にした学習はどう思いますか

(学生R) とても良い経験でした。また現地調査を行いながら、先生が理論的に解説してくれるから教室で学ぶより身についたものが多かったと思います。

(学生K) フィールドで学習の経験が少なかったのので、今回はいろいろの方からお話を聞くことができ、とても勉強になりました。ただ行き当たりばったりではなく、事前に調べて分からないことを確認する、理解を深めるといった作業がとても大切なんだと感じました。

■フィールドでの聴き取りとそのレポートづくりが上達したと思いますか

(学生R) はい、強くそう思います。文章をまとめる能力が上達したと思います。

(学生K) 項目分けの難しさを改めて実感しました。しかし、これが上達すれば、レポートづくりや論文ももっとうまくなるのかなあとと思います。私はまだまだ下手だなあと感じたのですが、きちんと意識することができるようになりました。

フィールド学習は、さらにもう一つ、前にも指摘したが、大学の取り組み、ひいては大学の存在をPRする効用をもっている。

大学の中で教育改革にどんなに奔走しても、それはほとんど外部に認識されない。ネットを使って情報発信すればよいという人もいるが、商品やサービスのサイトと同様に、当事者自身が発信する情報の訴求度はきわめて低い。

その点、メディアやロコミ情報の訴求度は大きなものがある。特に、パブリシティに取りあげられた情報は、信頼性と伝播力が極めて高いことは衆人の認めるところである。

それから、フィールド学習はフィールドとなる地域に対する効用も持っている。

特にゼミナールの場合のように、地域課題の解決策の提案などを行うと、外部の若い人の感性で地域を見てもらうという効用があって各地で歓迎される

し、過疎地になればなるほど、若い人たちが地域の中を往来すること自体が活気をもたらせてくれると言われたこともあった。

フィールド学習が双方向性の情報交流になるように配慮すると、学習機会は広がるとともに、多少なりとも社会貢献に資することができると思っている。

**歩車共存道路の整備軸に交通規制も
將軍塚駐車を拡張、観音下は廃止**



別所温泉の交通問題に提案
長野大の三田教授ゼミ

2年の歴史的な足跡をたどる別所温泉。別所温泉駅から北の山道に歩くと、かつての別所温泉の歩道(旧道)が狭く歩行者に危険なところや駐車場の問題などについての対策案を提案した。この提案を受けて山内会長は「大事な問題であり、観光地として死なせてはいけない」とも検討していきたいと認めていた。

2年の歴史的な足跡をたどる別所温泉。別所温泉駅から北の山道に歩くと、かつての別所温泉の歩道(旧道)が狭く歩行者に危険なところや駐車場の問題などについての対策案を提案した。この提案を受けて山内会長は「大事な問題であり、観光地として死なせてはいけない」とも検討していきたいと認めていた。

(資料1) 現地報告会の記事 (東信ジャーナル)

2. 研究フィールド・ワーク

筆者は、元々大学人ではなく、55歳になってから教員に就任したこと、しかもその学校(東北芸術工科大学)が作品(美術、設計、デザインなど)やインスタレーションなどを第一義とする人間達の集団であったこともあって、論文を書くために研究をするというモチベーションが働かず、専らまちづくりやむらづくりという実践課題を解くということに集中してきたので、長野大学の研究もその延長線上での取り組みに終始してきた。

中でも、別所温泉はフィールド学習だけでなく、

自身の研究や地域活動のフィールドとして日常化していた。

というのは、別所温泉は、平成21年に県の温泉地・スキー場地区再生モデル事業（期間3年間）に採択され、その役員として総務委員会と街づくり委員会での討議に加わっていたので、実質3年半にわたって、ほぼ月2回出向いていたので80回、それ以外に調査、イベント参加を加えると100回を大幅に超える回数通った計算になる。

自身の研究テーマは、だいたい、ゼミナールの学習テーマに重なるので、ゼミ生の地域での報告会にあたっては学生の成果と自身の成果を統合する形で披露してきた。

その中で特にメジャーなテーマは愛染閣跡地の活用と地区内の交通対策であった。この2点は、地元でも真摯に受けとめられたが、実行に移すプロセスの用意というところまで到達できていない。今後も、機会があればフォロー・アップして行きたいと思っている。

3. フィールドワークの勧め

このようなフィールド学習中心の授業は、学生の授業評価の上でも座学中心の授業よりも評価が高かった。

逆に座学中心の授業は、かなりかみ砕いた講義をしたつもりでも、試験の結果を見ると理解度は低く、改めてフィールド学習の効用を認識させられたが、その根底には“地域の教育力”の存在があると考えている。

こうしたフィールド学習を可能にした条件は3つ

ある。

一つ目は、長野大学の周辺には観光のフィールド学習の適地が数多く存在していることであり、これを活用しなければ地方私立大学のメリットを放棄するに等しいと思っている。

二つ目は、2コマ連続授業が組めたことで、現地滞在時間を最低1時間確保すると、最大片道1時間圏まで足を伸ばせるから、小布施(オアシスおぶせ)や軽井沢が圏内に入る。

三つ目は、スクールバスの存在であった。最初の年はバスがなく、受講生も少なかったので、8人乗りのワン・ボックスカーでしのいだが、2年目からは、27名乗りのバスが導入され、平日は強化部の利用がないので予約を取る上で全く支障がなかった。

心配だったのは、定員以上の履修生がでた場合の対応だったが、これも巧い具合に15～25名に収まった(収めた)。バスがなくて家用車を運転しなければならなかったら、これほど遠くまで足を伸ばすことはできなかったと思う。

第2点もカリキュラムの調整で可能となるので、長野大学ではフィールド学習を実施する上での障害はほとんど存在しないと言える。

長野大学は、“地域に貢献する”大学として高い評価を得ているが(日経グローバル)、加えて、その立地条件を最大限活かして“フィールド学習に力点を置く”大学としての特長をもっと強く打ち出したらどうだろうか。

東京などの大都会では体験できない教育カリキュラムをアピールできると思う。



(図) 別所温泉愛染閣跡地活用計画図



(図) 同左モンタージュ写真